

## 『中國文教科書』における西鶴作品について

国語教室 有働 裕

井原西鶴の作品は、今日多くの高等学校用教科書に一応採用されているが、教育現場において積極的に受け入れられているとは言い難い。それは、古典教育に関する論文や実践報告の類に西鶴作品を扱ったものが乏しいことから推測できるのであるが、このような状況は、西鶴作品の本質的な性格とかわりがあると言えよう。例えば暉峻康隆氏は、西鶴作品の性格とその享受の在り方を、「源氏物語」と比較して次のようにまとめられた。

時間と空間に支配されながらも、なお宮々として生き続けている古典にも、およそ二通りあるやうだ。主体的に創作の糧としてむかへられてゐる古典と、もっぱら享受のよろこびにつつまれている古典である。それは人をして創造のはげしさへかりたてるものと、憩ひを与えるものとの相違であらう。西鶴の小説は前者の性質を多分に有し、「源氏物語」などは後者の性質を多分に有する古典といへよう。これを具体的にいへば、文学実践にたづさはらない国民一般から無条件に敬愛されてきた「源氏物語」に対して、西鶴文学はもっぱら作家側で恐れられ、いどまれ、愛されてきたのである。<sup>(注1)</sup>

単に題材やテーマの問題（遊里や好色の諸相を描くと言った）ばかりではない。研究者によってしばしば指摘される通り、その面白さと裏腹に論じにくいと言われる文体や構成を備えていること<sup>(注2)</sup>も、家庭や学校において「享受のよろこびにつつまれる」ことの乏しかった理由であろう。

しかし、だからと言って、西鶴作品は教材に不向きだなどと結論

付けるつもりは毛頭ない。むしろこのような享受史を有するが故に、西鶴作品を教室で教えるという行為自体に従来の古典教育の在り方を相対化する可能性があると考えたい。他の古典文学に比べて決して多くはないにしろ教材化の試みや実践が重ねられてきた背景には、そういったことへの期待があったと言えよう。

ところで、教科書における西鶴作品の採用は、いったいいつごろから、どのような形で行われてきたのだろうか。管見の限りでは、明治四四年の『國文読本』巻十（国語漢文研究会・自治館）の「世界の借家大将」が最初である。その後、大正三年頃から各社で次第に採用されるようになり、戦前期としては昭和十年頃までが続いている。

本稿は、この時期に西鶴作品を採用した教科書の中から『中國文教科書』（初版明治三九年・吉田彌平・光風館）を選び、その採用状況を考察し、西鶴作品教材論のための基礎作業の一つとするものである。この教科書を選んだのは、明治三九年の初版から昭和二二年の修正二四版に至るまで、長期にわたって広く使用されたものであり、<sup>(注3)</sup>その中で西鶴作品が位置付けられそして消えていった過程を見ることができるといふ理由による。

## 一、本文について

『中國文教科書』の発行・修正の過程は、昭和二二年修正二四版等の奥付で確認できる限りでは以下の通りである。

明治三九年一月一八日発行  
 明治四〇年一月一日修正再版発行  
 明治四三年一月五日修正三版発行  
 明治四四年一月二八日修正四版発行  
 明治四四年一月一五日修正五版発行  
 明治四五年二月二六日修正六版発行  
 大正元年一月三日修正七版発行  
 大正元年一月二三日修正八版発行  
 大正三年一月二八日修正九版発行  
 大正四年一月五日修正一〇版発行  
 大正六年一月三日修正一一版発行  
 大正七年一月五日修正一二版発行  
 大正一〇年一月二八日修正一三版発行  
 大正一一年一月一日修正一四版発行  
 大正一二年一月一八日修正一五版発行  
 大正一四年一月二八日修正一六版発行  
 大正一五年二月六日修正一七版発行  
 昭和四年九月二〇日修正一八版発行  
 昭和五年一月一三日修正一九版発行  
 昭和六年八月一四日修正二〇版発行  
 昭和六年一月二四日修正二一版発行  
 昭和九年八月八日修正二二版発行  
 昭和九年一月一八日修正二三版発行  
 昭和一二二年八月三〇日修正二四版発行

西鶴作品の採用は、大正三年修正九版の巻八に収められた「智慧の振賣」が最初である。この作品は大正七年の修正一二版まで続けて採用されていたことが確認できる。そして、大正一〇年の修正一

三版、大正一一年の修正一四版は未見のため不明であるが、大正一二年の修正一五版では、これに代わって「借家大將」が巻七に収められている。「借家大將」は大正一五年修正一七版まで採用されていたことが確認できるが、昭和四年の修正一八版から昭和六年の修正二一版までについては未見のため不明である。昭和九年の修正二二版以降については、西鶴作品の採用はない。

未見のものが多く、調査がはなはだ不十分な段階ではあるが、と

りあえず既見のものの本文を示すことにする。

(一) 「智慧の振賣」(大正三年・修正九版)

『西鶴織留』(元禄七年)巻三の四「何にても知恵の振賣」全文。用字・句読点等は有朋堂文庫の『西鶴文集 下』(大正二年・藤井乙男校訂)に近い。修正十版以降、句読点等に修正が加えられている。挿絵はない。

一一 智慧の振賣 井原西鶴

大海の底に尾閥といふ穴あり、諸川の水日々夜々に入れども、彼のうちにて失するが故に増すこと更に無し。人間に一つの口あり、此の尾閥の如し。一生のうち朝夕食物限もなし。身過ぎは八百八品、それぐにそなはりし家職に油断することなかれ。今時は正直を以て其の身の骨をくだけば天理に叶ひ、それぞれの渡世致さぬといふことなし。總じて諸國の城下又は入舟の湊などは、人の足手かげにて様々すぎはひの種もあるぞかし。されば山城の伏見の里は七八十年も見及びしに、通筋の脇々は昔繁昌の時の町並残りて、次第々々に物の淋しくなりて何商賣するとも知れず年月を送るもの、其の數知れず。これを思ふに千軒あれば共過ぎぞかし。

近年は人の心賢しうなつて、大方の働にては中々身過ぎに成り難し。

過ぎし年の師走に竈の上塗をしにまわるを手廻しのよき事と思ひしに、又今年の暮には達者なる男が釜磨きに歩きける。大釜五文、其の外は大小によらず二文づつなり。又餅米洗ひ買一斗二文にて埒の明くこと、手前に人を持たぬ者は勝手よし。又表具屋の隙なる細工人と見えて、定木・竹べら・刷毛・糊まで持ちてお座敷の腰張一間を一文、あかり障子一枚二文、何行燈にても一文にて掃除までも致しける。年徳棚を買ひければ、釣木・釘まで持ち来りて、恵方を改め吊りて歸りぬ、何にても自由なる世時になりける。是等は世帯の事にて、中より下の人のためにもなりぬ。

又五十ばかりの男風呂敷を肩にかけて、猫の蚤を取りましょよ」と聲立て、まはりける。隠居がたの手白三毛をかはゆがらるゝ人、取れとて頼まれるけるに、一疋三文づつに極め、名譽に取りける。先づ猫に湯をかけて洗ひ、ぬれ身を其のまゝ狼の皮に包みてしばし抱きけるうちに、蚤どもぬれたる處をうたてがり、皆狼の皮に移りけるを大道へふるひ捨てける。是程の事にも、そも〳〵何としてか分別仕出し、身過ぎの種とはなりぬ。

今程諸人賢く物言はずして合點する世の中に、年がまへなる男、子細らしく小脇指に大巾着さげて、皮立附を着て、「何にはよらず世間に合點の行かぬ事あらば問うて見給へ。随分人の身上にむづかしき事の談合相手になるし」と口廣く言ひ廻りぬ。心ある人は耳にも聞き入れず、大方の人は肝潰して、いかなる虎落大明神のおとし子にてもあるらんとつらつら貌を眺めける。過ぎにし秋の頃、三軒屋川口へ沙魚釣舟に出でし人、酒に亂れて後、釣りたる沙魚を丸焼にして敷食ふことを手柄におの〳〵あばれける中にも、殊更一疋一口にせし人、俄に咽を苦しめける。これはいかにと見るに、此の沙魚の腹に二寸ばかりの糸付いて釣針あるを喉に立て、さまざまもぬける事なく、此の難儀、すべきやうなく、船中鼓、三味線も鳴り

をやめて、後代に書き残せし法師の足鼎の如く迷惑して、命もあぶなく宿に歸り、醫師に見せて抄らず。とやかく内談する折節、彼の工夫者の通りける程に、此の事を語りければ、「これは即座に抜く事ぞ」と、細かなる珠數の玉を解きてかの糸へ一つ々々通しかけて、其の後糸を締めて徐かにしやくりかける程に、何の子細もなく抜きける。いづれも此の才覺を感じける。

其の座に物言ひ堪忍せぬ男の有りけるが、「我等もすこし御無心有り。近年商賣左前にて、立處居處にて損銀かさなり、此の様子大方世間にも見及び聞き傳へて萬事賣掛せねば、次第に手づまり、此の行先の節季何と分別致しても、差引算用して二十貫目餘も足らぬに極まりける。此の談合相手に頼みたき」といへば、「女房衆の親元分限か、又は金持の出家に弟はないか」といふ。「それは持ちませぬ」といへば、「此の談合は埒が明かぬ」と申して歸りける。(織留)

(頭注)

井原西鶴 江戸時代の小説家。大阪の人。(二三〇二―二三五三)

尾閭 尾者在二百川之下、故稱尾。閩者聚也、水聚族之處、故稱閩。

三軒屋川 淀川の下流の一名

(2) 「借家大将」(大正一二年・修正一五版)

『日本永代蔵』(貞享五年)の卷二の一「世界の借家大将」の全文であるが、書き改められている部分が三カ所ある。『定本西鶴全集』(中央公論社)の本文と比較すれば、以下の通りである。

借屋請狀之事室町菱屋長左衛門殿借屋に居申され候藤市と申人  
↓室町菱屋長左衛門殿借家に居申され候藤市と申す人  
一生のうちに絹物とはは紬の花色。ひとつは海松茶染にせし事

若ひ時の無分別と廿年も是を悔しく思ひぬ。↓一生の内に絹物としては海松茶染にせし袖一つ。若い時の無分別と、二十年も是を悔しく思ひぬ。

引ならひの眞綿も着丈堅横を出かしぬ。いづれ女の子は遊ばすまじき物なり。↓いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。

文法的に破格で難解な部分を理解しやすくしようとしたものである。底本にはやはり有朋堂文庫を用いたものと思われる。

大正一四年の修正一六版では一五版になかった凶版（西鶴の肖像と筆蹟）が加えられ、頭注はひらがなが用いられて増補されている。

### 一三 借家大將

井原西鶴

室町菱屋長左衛門殿借家に居申され候藤市と申す人随に千貫目御座候。廣き世界にならびなき分限我なりと自慢申せし。仔細は二間口の棚借にて千貫目持、都の沙汰になりしに、烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀つもりておのづから流れ、始めて家持となり、是を悔みぬ。今までは借屋に居ての分限といはれしに、向後、家あるからは京の歴々の内蔵の塵埃ぞかし。

此の藤市利發にして、一代のうちに斯く手前富貴になりぬ。第一、人間堅固なるが身を過ぐる本なり。此の男家業の外に反故の帳をくゝり置きて見世をはなれず。一日筆を握り、兩替の手代通れば錢・小判の相場を附置き、米問屋の賣買を聞合せ、生薬屋・呉服屋の若い者に長崎の様子を尋ね、繰綿・鹽・酒は江戸棚の状日を見合せ、毎日萬事を記し置けば、粉れし事は爰に尋ね、洛中の重寶になりける。

不斷の身持、肌は單襦袢、大布子綿三百目入れてひとつより外に着ることなし。袖覆輪といふこと、此の人取りはじめて、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて、終に大道を走りあ

りきし事なし。一生の内に絹物としては海松茶染にせし袖一つ。若い時の無分別と、二十年も是を悔しく思ひぬ。紋所を定めず、土用干にも疊の上に直には置かず、麻袴に鬼纏の肩衣、幾年か折目正しく取置かれける。

町並に出づる葬禮には、是非なく鳥部山に送りて、人より跡に歸りざまに、六波羅の野道にて丁稚もろとも當薬を引いて、是を蔭干にして、腹薬なるぞと、只は通らず、躑く處で燧石を拾ひて袂に入れる。朝夕の煙を立つる世帯持はよろづ斯様に氣を附けずしては有るべからず。

此の男、生れついて吝きにあらず。萬事の取廻し人の鏡にもなりぬべき願、かほどの身代まで年とる宿に餅搗かず。忙しき時の人遣ひ、諸道具の取置もやかましきとて、是も利勘にて大佛の前へ詔へ、一貫目に付何程と極めける。十二月廿八日の曙、いそぎ荷ひつれ、藤屋見世ならべ「請取り給へ」といふ。餅は搗きたての好もしく春めきて見えける。旦那はきかぬ顔して、十露盤置きしに、餅屋は時分柄にひまを惜み、幾度か斷りて、才覺らしき若い者、ちきの目りんと請取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて、「今の餅屋請取つたか」といへば「はや渡して歸りぬ」。「此の家に奉公する程にもなき者ぞ。濫もりのさめぬを請取りし事よ」と、又目を懸けしに、思の外に減のたつこと、手代我を折って、喰ひもせぬ餅に口をあきける。

其の年明けて、夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生を籠に入れて賣り來るを、七十五日の齡、これ樂みの一つは二文、二つは三文に直段を定め、何れか二つ取らぬ仁はなし。藤市は一つを二文に買ひていへるは、「今一文で、盛なる時は大きなるが有り」と心を附くる程のことあしからず。

屋敷の空地に柳・柊・樺葉・桃の木・花菖蒲・薺苺仁など取りませずて植置きしは、一人ある娘が爲ぞかし。葭垣に自然と朝顔のはひか

りしを、同じ眺めにははかなき物として刀豆たまよに植ゑかへける。  
 何より我が子を見る程面白きはなし。娘大人しくなりて頓て嫁入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡を見たらば、見ぬ處を歩きたがるべし。源氏・伊勢物語は心のいたづらになりぬべきものなりと、多田の銀山なだ出盛りし有様書かせける。此の心からはいろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず、京のかしこ娘となしぬ。

親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず、節句の難遊をやめ、盆に踊らず。毎月髪かしらも自ら梳きて丸鬘まるまげに結ひて身の取廻し人手にかゝらず、いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。折節は正月七日の夜、近所の男子を藤市方へ長者になるやうの指南を頼むとて遣はしける。座敷に燈かゞやかせ、娘を附け置き、露地つゆぢの戸の鳴る時しらせと申し置きしに、此の娘しをらしくかしこまり、燈心を一筋にして物申ものまうの聲する時、元のごとくにて勝手に入りける。三人の客座敷に着く時、臺所に播鉢はくちの音響き渡れば、客耳を悦ばせ、是を推して「皮鯨の吸物」といへば、「いや／＼始めてなれば雑煮なるべし」といふ。又一人はよく考へて「煮麵ちぢめん」と落着きける。必ずいふ事にしてをかし。

藤市出でて三人に世渡の大事を物語して聞かせける。一人申せしは「今日の七草といふいはれはいかなる事ぞ」と尋ねける。「あれは神代の始末はじめ、増水といふことを知らせ給ふ。」又一人、「掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは」と尋ぬ。「あれは朝夕に肴を食はずに、是を見て食うた心せよと云ふ事なり。」又太箸をとる由來を問ひける。「あれは穢れし時、白げて一膳にて一年中ある様に、是も神代の二柱を表すなり。よくよく萬事に氣を附け給へ。楮、宵から今まで各々話し給へば、最早夜食の出づべき處なり。出さぬが長者になる心なり。最前の播鉢はくちの音は大福帳の上紙に引く糊を搦らし

た。』といはれし。(日本永代藏)

(頭注)

井原西鶴 元禄時代ノ小説作者 元禄六年(二三五三)歿 五十二年

室町 京都市烏丸通ノ西ノ通

烏丸通 今ノ京都鐸ノ前ヲ北ニ通ズル通

海松茶染 海松ノヤウナ黒ミガカタ茶色デ染メカヘシノキカヌ色

大佛 京都方廣寺ノ大佛

東寺 京都ノ南端九條ニアル

多田の銀山 攝津國河邊郡多田村ニアル古イ鑛山 伊丹ノ北ニ厘餘

### 三、教科書編集方針との関連

以上のような西鶴作品の教材化は、『中國文教科書』の編集方針とどのようにかかわっているのか。その点を、第一巻冒頭に付された「例言(緒言)」と教材編成との関係、『中國文教科書教授備考』(大正一五年・修正一七版用)(注4)の記述の二点から考察したい。

#### (1) 「例言」と教材編成

まず、『中國文教科書』の「例言」がどのように変化していったかを見てみたい。明治三九年の初版では次のように記されている。

一、本書は中學校の國語科における講讀用教科書に充てんがために、文部省所定の教科要目に準據して編纂せるものなり。

一、本書に採録せる文章は普通散文、口語文、書翰文及び韻文の四種とす。就中今體の普通文即ち時文は毎卷常にその要部を占む。而して古體の普通散文即ち古文も上級に進むに従ひて適宜これを採録したり、蓋し現代の思想を領會せんには専ら

時文によらざるを得ず、又國民的情操を涵養せんには主として古文によらざるを得ざればなり。

一、本書に採録せる文章は務めてその材料を各種の方面に取りて一部面に偏せざらんことを期したり。而して興國進取の氣象を鼓舞すると共に堅實健全なる思想を養成せんことは編者の特に意を用ひたる所なり。(以下略)

以後、多少の字句の修正はあるものの、大正元年の修正八版まではほぼ同じ内容である。変化が見られるのは大正三年の修正九版からで、特に二番目の文章が次のように書き改められている点に注目したい。

一、本書に採録せる文章は、普通文、口語文・書牘文及び韻文の四種とす。而して第四學年及び第五學年に於ては各時代の代表的文學の一斑を示し、以て文學史の概要を知らしめんことを期せり。

つまり、「國民的情操を涵養」というやや精神論めいた観点によったのではなく、「文學史の概要」を知るといふ知的教養の育成を意図して古典文學の教材化を試みたといふのである。

このような「例言」に示された編集意図の反映として西鶴作品は採用されるようになったと考えてよいだろう。修正九版では「智慧の振賣」に続けて幸田露伴の「巢林と西鶴馬琴」<sup>(注5)</sup>があり、同じ巻に「江戸時代の文學」(『<sup>新</sup>日本文學史教科書」による)という文章も収められている。「巢林と西鶴馬琴」は、

西鶴を無學のやうに云ひ、巢林を博識のやうにいひなすは、生賢しくも他の甲乙など論ずるものゝ常の語草となりたれど、實は矮人觀場の談なるべし。

と書き始められた文章で、西鶴・近松の近世期の評価を検討した上で、

文に遊ぶもの漫に西鶴・巢林たらんことを欲すべからず、たゞ當に馬琴の困勉を師とすべきなり。

と結んでいる。「江戸時代の文學」は国学・俳句・戯曲・小説の四分野に分けて解説したもので、西鶴に関しては次のように記されている。

井原西鶴大阪に出でて、從來の幼稚なる小説を一轉して、巧に世間の風俗・人情を寫せり。その文輕妙奇抜にして、法格に拘はらず、社會の裏面を描きて微細を極む。

いずれも、元禄時代の「代表的文學の一斑」としての「智慧の振賣」の理解を補うものであると言えよう。

「巢林と西鶴馬琴」は大正四年の修正十版には採用されたが以後姿を消す。「江戸時代の文學」は引き続き採用され、大正一四年の修正一六版では、「例言」に、

全巻を通じて中心になって居るのは現代文です。なほ生徒の學力に應じて各時代を代表する文學をも採りました。そして最後に國本學史<sup>(注6)</sup>の概要を附説する仕組にしました。

とある通り、各巻に散在していた文學史解説の文章を第十巻の最後に集め、「國文學史」として収めている。

それでは、西鶴作品が概に採用されなくなっていた昭和九年修正二二版の場合はどうか。まず「例言」において、

本書は現代文を經とし、各時代の代表的文學を緯とし、専ら生徒の學習能力を標準としてそれに適應するやうに組織しました。而して全巻を通じてその基調となつてゐるものは實に我が國文學を貫き流れる日本精神であります。

と記されていることから、編集方針が文學史の重視から「日本精神」の重視へと變化したことがうかがえる。

各時代毎の文學史的な解説文は再び各巻に戻され、巻七にはやは

り「江戸時代の文學」という文章が収められているが、修正一六版までのものとは異なっている。出典は記されていない。記述は全体に詳しくなっており、西鶴に関しては次のように記されている。

次に出でたるは浮世草子の類にして、その代表作家を井原西鶴とす。西鶴は大阪の町人に宗因門下の逸足なり。蓋し彼はその俳諧修業中に練磨したる觀察眼と表現力とを、ここに遺憾なく發揮せるなり。即ちかの假名草子の因襲的・類型的なるとは全然創作態度を異にして、大膽に目前の實際的題材を捉へ、犀利なる筆法を以て文を行ふこと奔放自在、以て元祿の時勢粧をさながらに活寫したり。その作品には、滔々たる現世謳歌の思想の裡に、一種道義の念と一脈無常の感との流るゝを感ずべし。

かくて西鶴の出現は、行詰れる當時の小説界に新局面を開くのみならず、爾後の文藝史に永くその光芒を放てり。西鶴の後、その流を汲める作に八文字屋本と稱するものあれども、その觀察、その描寫、西鶴に比してはたく劣れり。

記述の量のみから考えれば、文學史重視の方針がまだ生かされているようにも思えるが、「一種道義の念と一脈無常の感」といった性格付けに注目すべきであろう。この文章全体が「是等文藝界を支配せる思想は儒教の精神なり」という前提で書かれていることも関係しているのだが、作品そのものを載せずに「日本精神」に従属させた文學史解説を以てそれに代えるというのを、この時期の西鶴作品に対する扱いの一つと見ることができよう。

では、「例言」の変化に対応して、教材編成はどのように変化したのか。修正一七版と二二版との、巻七の目次を比較すると次のようになる。

- |  |   |
|--|---|
| <p>(修正一七版)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>一 太陽の言葉(島崎藤村)</li> <li>二 偉人(嘉納治五郎)</li> <li>三 理想(阿部次郎)</li> <li>四 皇太后宮を悼み奉る(星野恒)</li> <li>五 法隆寺(高濱虚子)</li> <li>六 斑鳩の宮(三木羅風)</li> <li>七 長谷部信連(平家物語)</li> <li>八 俳人芭蕉(藤岡作太郎)</li> <li>九 平泉(松尾芭蕉)</li> <li>一〇 山吹</li> <li>一一 新緑の野(安倍能成)</li> <li>一二 扇的(平家物語)</li> <li>一三 壇の浦(五十風力)</li> <li>一四 舊師に懷を述ぶ(頼山陽)</li> <li>一五 頼山陽(朝比奈知泉)</li> <li>一六 芥川久米兩君へ(夏目漱石)</li> <li>一七 戲作三昧(芥川龍之介)</li> <li>一八 芳流閣上の奮闘(瀧澤馬琴)</li> <li>一九 旅行(山路愛山)</li> <li>二〇 眠れる蝶(北村透谷)</li> <li>二一 大正の震災(坪内逍遙)</li> <li>二二 富士が見える(鶴見祐輔)</li> <li>二三 借家大將(井原西鶴)</li> <li>二四 千里が竹(近松門左衛門)</li> <li>二五 麒麟(谷崎潤一郎)</li> </ol> | <p>(修正二二版)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>一 櫻と國民性(深作安文)</li> <li>二 春の心(古今和歌集)</li> <li>三 花を惜しむ(村田春海)</li> <li>四 見よや春(渡邊華山)</li> <li>五 鎮西八郎(保元物語)</li> <li>六 足摺(平家物語)</li> <li>七 平家の最後(高山樗牛)</li> <li>八 旅人芭蕉(荻原井泉水)</li> <li>九 青葉</li> <li>一〇 奥の細道(松尾芭蕉)</li> <li>一一 頼山陽(朝比奈知泉)</li> <li>一二 水蓼(荻原廣道)</li> <li>一三 千里が竹(近松門左衛門)</li> <li>一四 浦の秋風(賀茂真淵)</li> <li>一五 江戸時代の文學</li> <li>一六 光頼卿の参内(平治物語)</li> <li>一七 人臣の道(北畠親房)</li> <li>一八 俚諺論(大西祝)</li> <li>一九 四時のあはれ(兼好法師)</li> <li>二〇 照る月浪(東關紀行)</li> <li>二一 旅行(山路愛山)</li> <li>二二 斑鳩の宮(三木羅風)</li> <li>二三 日本文化の優秀性(鹿子木員信)</li> </ol> |
|--|---|

二六 春立つ今日（古今和歌集）

二七 三つの眺（芳賀矢一）

入れ替りの激しい現代文に比べ、芭蕉・近松の評価の安定していることがわかる。その中において、元禄の文人としては西鶴のみが抜け落ちていった形となっている。

(2) 『學國文教科書教授備考』

『學國文教科書教授備考』（修正一七版用）巻七は大正一三年五月一二日の発行で、光風館編輯所編、同書店刊である。『學國文教科書』の指導書で「借家大將」についての解説を含む。以下、同書の内容を紹介しつつ、そこでの西鶴作品の扱いについて述べることにする。

序文に相当する「『學國文教科書教授備考』の改訂について」では、まず「今回教科書の修正に際して本書は文體をすべて口語に書きなほし、尙記事の内容・體裁を次のやうに改めました」と述べ、「一 解題」「二 作者」「三 主眼」「四 概説」「五 語句の解釋附文法修辭法上の吟味」「六 取扱上の用意」「七 備考」「八 教科書の本文」の各項を設けた意図を説明している。その中から「二 作者」「三 主眼」を次に引用する。

二 作者

こゝでは、例へばその作者が文。學。者。な。ら。ば、その文。壇。上。の。位。置。作。風。主。なる。著。書などについて略述しました。學者、評論家などについても亦同じ要領で記しました。小傳は教科書の頭註を補ふに足りる事項を擧げることになりました。

三 主眼

その一篇の生。命。と。し、ね。ら。ひ。ど。こ。ろ。と。考。へ。ら。れ。る。點を述べまし

八

た。内容・形式の兩方面から考へたことは勿論ですが、それを断ることは強ひて致しませんでした。すべての文章が内容と形式との上から、別々の目的を有してゐるとは見られませんが、或文章に於ては、全然離して考えることが許されないからであります。又、或場合には、特に編者がその篇を採録した理由なども述べることにいたしました。

今日見ればとりたてて目新しい内容でもないが、やはり修正九版以後の「例言」に見られる文学史重視、あるいは大正期の文学重視の教育思潮との関連を指摘することができよう。明治期や昭和九年以後の「例言」に見られた日本精神云々の記述が全くないことに注目したい。

次に、西鶴の「借家大將」がどう扱われているかであるが、まず「一 解題」では『日本永代蔵』を「勤勉節儉を説き、一種の商人立志傳とも見らるべきもの」と性格付けている。ところが、「三 主眼」では次のように述べ、そういった教訓的解釈に立つて採用したものではないことが示されている。

一滴を舐めても大海の潮を知るといふ、眞に特色ある作物ならば、一頁讀んでもその特色は知られる筈である。西鶴は極めて特色のはっきりした作家である。この一文の熟讀によつて、その「敏慧尖锐なる諧謔諷刺」と、その「輕妙簡潔なる俳諧的修辭」とを特色とする西鶴の作風の一端を味はしめたものである。借家大將即ち藤市といふ男は、よほど變つた男である。かういふ變つた男を捕へるといふことが、すでに西鶴の觀察でなければ出来ぬし、その變つた男の面目をきびきびと發揮するやうに描くことが、又西鶴の筆力でなければ出来ぬ。その鋭い觀察、その強い筆力について指導し、延いては、彼の我が國文學上に於ける小説家としての位置について、大體の説話をも試み

るべきである。

変わった男藤市に対する観察という点を主眼としてとらえ、むやみに「高度な」主題を求めなかった点は、ある意味で作品の本質を的確にとらえていると言えよう。

一方、「将家大将」の文章中には、確かに教訓的とも思われる記述が存在しているのだが、その点は「五 取扱上の用意」で、西鶴の文章の「文法的破格」について詳しく注意した後、

尚内容上からいふと、

人間堅固なるが身を過ぐる本なり。

世帯持はよろづ斯様に氣を附けずしてはあるべからず。

いづれ女子は遊ばすまじきものなり。

などの口吻に、如何にも長者教といったやうな味ひがこもつてゐることに注意せしめたい。

と書くにとどめている。

また、「六 備考」には、佐藤鶴吉の「西鶴の文章について」と田山花袋の「永代藏と胸算用について」の二つの文章が収められている。<sup>(注も)</sup>前者は西鶴の文章の難解さと妙味とを、俳諧の附合と「殊語の使用」との関連で説明したものであり、後者はモーパッサンや近松と比較しつつ、

私の考では、日本の文壇で、「金」を本當に取扱つた作者は<sup>(つぎ)</sup>

かれを除いては他にないと思ふ。

と結論付けたものである。当時の文壇における西鶴評価をそのまま教育の場に取り込もうとする試みであり、この『教授備考』の編集姿勢をよく示していると言えよう。

しかしながら、以上のような方針で教科書あるいは指導書が編集されていたとしても、教育現場においてそれが生かされるとは限らない。むしろ、次のような井上敏夫氏の体験談を読む限りでは、生

かされない場合の方が多かったように思われる。

大正一三年、中学に入学した私たちが使用したのは、吉田弥平編『<sup>中</sup>国文教科書』（光風館）であった。

「美しき日本」とか「春の光」とか、折からの気候風土にふさわしい美文を朗読することは、かなり程度の高い文章表現ではあったが、進学の喜びにまぎれて、それほど苦痛とは感じられなかった。二葉亭の「ポチ」とか、漱石の「猫」とか、白秋の「雀」とか、新しい文学の香のする作品が、所々に編みこまれていて、それを家庭で下読みすることは楽しかったが、学校の教室では、そうした文学作品鑑賞に関する指導はいっさい行われなかった。

(中略)

大正時代は、すぐれた現代文学作品が競って国語教科書に採択された時代であるが、地方の中学校の国語教室では、ほとんどまだ訓話注釈一点ばりであって、生徒の文学に対する渴望は、何ら医されるところがないというのが一般であった。<sup>(注7)</sup>

従って西鶴作品の扱いについても、『教授備考』の記述と現場の実態とは大きな開きがあったと思われる。同じ「世界の借家大将」を扱っている東京開成館編の『現代國語讀本教授参考書』（昭和一年・東京開成館発行）巻十などは語釈中心のもので、作者についてもその一つとして扱われているにすぎず、鑑賞に関する記述は極めて乏しいのであるが、こちらの方がより実情に即したものであったのかもしれない。だとすれば『<sup>中</sup>國文教科書』の編集方針はそれだけ際立ったものであったと言いうこともできよう。

## 結びに代えて

## — 西鶴作品教材化の背景

『<sup>中</sup>學國文教科書』は、明治末から昭和一〇年代までの長期にわたって、各時代の教育思潮を反映しつつ修正を繰り返した。その中にあって西鶴作品は、大正期に入って文芸性が重視されるようになるとともに採用され、昭和一〇年頃に「日本精神」が重視されるとともに消えていったことになる。「例言」にあるように、「文學史の概要」を知るための各時代の「代表的文学の一斑」として採用されていたことになるが、そのねらいが、単に作品をちりばめただけのものや、強引に系統性を持たせようとしたものとは異なり、各時代の個性をそれぞれに理解し読み味わう点にあったことが、『教授備考』の記述からうかがえる。

このような教科書における西鶴作品の消長は、必ずしも各社歩調を合わせて行われたわけではない。先に示した如く、昭和の一〇年代になっても「世界の借屋大将」を採用している教科書がある。当然のことながら、教科書教材全体の変遷の中の西鶴作品の位置を明らかにし、その背景、大正期の文学教育云々といった大づかみなものではなく、国語教育界における近世文学や西鶴作品に対する評価の実態といったものに言及しなくてはならないわけだが、未だ調査の不十分な段階であり、紙数にも余裕がなくなった。これらの課題については改めて詳述することとし、取りあえず目についた記事をいくつか示すことにする。

まず、『<sup>中</sup>學國文教科書』の「例言」に見られたような、文学史を念頭に置いた教材編成の発想は、大正一一年一二月の『信濃教育』所収の垣内松三「国語教材の文学方面より見たる研究」にもうかがえ、国語教育界の一つの動向であったことが理解できる。ここで垣

内は、中等教育の国語教材についてより広く取材しなくてはならないという立場に立ちつつも、西鶴を含む近世文学の扱いについては次のようにとまどいを見せている。

とにかく徳川期文學の量に於ての大部分は放縱であつた。従つてこれが文學そのものの總評にまでなつてしまつた。しかし近世文學から流れ出た放縱は *confinity* に禁止された如く全然教材に採らないならば、かゝる方面の洗練淨化は如何にして成されるか。惡として醜として眺め得る所に、即ち克服する所にかゝる文學の意味があるのではないか。それにしても中等教育でこれを果するには如何にすればよいか。又一般世間でこれを文學としてこれを文學として判定しつゝある無識を如何にすればよいか。又一般世間でこれを文學として判定しつゝある無識を如何にして正する。併せてこの無識をも克服しなくてはならないか。

しかし、現場では近世文学をより積極的に受け入れようとする動きもあつたようで、『國語と國文學』大正一三年七月号に、多田義延（成城中學校教諭）の「中學生と江戸文藝」という文章が掲載されており、近世文学を中学生に教えることが強く主張されている。これに呼応して同年の八月号には大澤秀雄「中學生と江戸文藝を讀んで（投書）」が載せられ、多田への強い賛意が示されている。また、大正期の作家や研究者の間で西鶴への関心が高まっていたことは既に知られているが、そういった方面からの教科書に対する関心を、樋口慶千代の「江戸時代新興文藝に就いて」（『國漢』昭和六年一月）の、近世文学の諸作品は「石部金吉の學校教科書よりも國民性に偉大な影響を與へてはゐないであらうか」といった記述や、「江戸時代の所謂戯作が學校教科書の中に擯用されるようになったのも最近の事に屬する。（中略）大衆は古典文藝にも趣味を持ち、

新らしきを知つて戴きたいものである」といった表現から読み取ることもできそうである。

国語教育界の内外に、西鶴作品の教材化をめぐるどのような動きがあったのか。先にも述べた通り、昭和戦前期をも含めて調査し、その実態を明らかにすることを今後の課題として考えている。

(平成元年十二月二日受理)

(注)

- 注1 暉峻康隆『西鶴評論と研究 上』(昭和二三年・中央公論社)
- 注2 この問題点については、広末保「未完の形式―西鶴の主体」(『講座日本文学 西鶴 上』(『解釈と鑑賞』別冊・昭和五年一月・至文堂)等に詳しく述べられている。
- 注3 井上敏夫氏は、『国語教育史資料』(昭和五六・東京法令)二巻に、「明治・大正・昭和を通じて最も多く採用された教科書」と記している。
- 注4 国立国会図書館図書閲覧課別室所蔵。『中國文教科書教授備考』の、西鶴作品を扱った他の版のものについては未見。
- 注5 『潮待ち草』(明治三九年・東亞堂)所収。
- 注6 「西鶴の文章について」は大正一三年六月『文章倶楽部』所収「西鶴の言葉」、 「永代藏と胸算用」は大正六年七月『早稲田文学』所収「西鶴小論」がそれぞれ出典。
- 注7 『国語教育史資料』二巻

附記

本稿を成すにあたり資料の閲覧を御許可下さった国立教育研究所付属図書館・国立国会図書館・東書文庫の各位に深謝申し上げます。特に、未整理資料にもかかわらず閲覧に格別の便宜をおはかりいただいた国会図書館図書閲覧課別室の皆様

に心より御礼申し上げます。